郵便報知新聞

第四百六十三号

誠の心ハ赤阪の溜池ハ折く蓮花濁ハ染ね
藝妓の梅吉其色と香ハ濁ると中島精
美が学びの道も何しろ疎く且夕ハ色と酒と
ハ心と奈良見漫地なる日と月ハ双親の嘆き
大方うしろと聴て愕然梅吉ハ好男子くゝ氏
君青年ハ法ましハ英傑獨魯の学問ハ
心と留めあるべ世ると柿ろ博士と云れのハ
異質あった賤妾が如き者ハ心と惑しめべく
最情色と怨ぜしに男ハ彼が赤心ハ感服し
心と革め学の道ハ進じハ梅吉ハ其ハ
ありと喜びて己が細き絲竹の生活以て
燈火の價に資しかが男ハ益感激し浮
る心登掛て讀書そのこ勉励しとぞ
此ハ明治七年夏とゝきしぬ

松林伯圓記

大藤茅宇

金鶴堂